日文教育資料［図画工作・美術］

子どもたちが「美」を感じる瞬間（とき）

まなびと+ Plus

vol.7

日文の実践事例、教科情報
詳しくはWebへ！ 日文 検索

座談会出席者

【司会】
渡部 憲生 先生
喜多方市立第一小学校

米本 順一 先生
田村市立船引小学校

奥山 陽介 先生
桜の聖母学院小学校

倉元 美千代 先生
三春町立三春小学校

紺野 律 先生
福島市立森合小学校

日々試行錯誤をしながら作品づくりをする子どもたち。子どもたちはどんなときに「美」を感じ，創造の源泉にしているのでしょうか。そもそも美とはどういうものなのでしょうか。今回は図工・美術の根幹にかかわるテーマともいえるこの難題について，福島県の先生方に真っ向から話し合っていただきました。

一人ひとりの思いを大切にしながら

渡部：この座談会のテーマは『子どもたちが「美」を感じる瞬間（とき）』です。図工・美術にとって普遍的なテーマであり，面白い話し合いができるのではと楽しみにしております。**まずは先生方が，どのようなことを心がけて日々の授業を進められているか，お聞かせいただけますか？**

米本：子どもたちが図工をやっていて心地よいということを大事にしています。つくり出す喜びであり，新しいことができるようになった，つくったものが喜んでもらえたといったことです。もう一つは学び合いです。授業の途中で友だちとかかわる場面を投げかけたり，作品になった子どもの表現をクラスや学校・家庭とどのようにつないだりするかといった，他者とのかかわりを意識して授業を行っています。

奥山：私の場合は私立ということで，作品の質が求められるという部分はあります。全員に正しい用具の扱い方や，基礎・基本となる技能を丁寧に教えるようにしています。一方で，制作過程で子どもが何を学び，何を考えたかということを大切にしたいと思っています。そのために，自由に発想し，選択しながら，表現できる活動を意識的に設定するよう心がけています。

倉元：子どもたちがつくりたいという思いに寄り添い，支援，指導するということを一番大事にしています。授業中の言葉がけの中では，どうしても教師である私の価値観が入ってしまいますが，押し付けにならないようにしています。ただ「つくれた！面白かった！」ではなく，過去の自分と比べての変容をとらえて，「去年の自分はここまでだったけれど，今年はここまでできるようになった」とか「次はこういうことをやってみたい！」とか，自ら学び，学んだことが子ども自身でもわかるようにしていきたいと考えています。

紺野：大切にしていることは，一人ひとりが持っている発想の豊かさを活かせる授業ということです。やっているうちに思いついたり，友だちがやっていることを見て試しにやってみたり，友だちの考えているところと自分の考えているところはどこがつながっているのか，そういうことまで含めた発想です。同じ作品ができてしまっては図工ではないので，子どもたちの思いついたものが多様であり，かつできた作品が面白い，となるようなことを探っています。

渡部：「『表現する喜び』『子ども一人ひとりが思いを具現する』ことを大切にしている」，「基本的なことはきちんと指導していく」という話が出てきましたが，その辺りは「美」にかかわってくる部分になるのではないかと思います。**子どもたちはどんなときに「美」を感じているのでしょうか？**

奥山：大きく三つの場面が思い当たります。一つは正確にできたときなどに感じる「思うようにできたときの美」です。二つ目は「自分の予測以上のものができたときに感じる美」です。モダンテクニックであったり，偶然にできたものであったり，また，自然の美しさとの出会い，あるいは作家作品との出会いなどでしょうか。そして三つ目は自分一人ではできないような「共同制作の迫力ある美」です。

倉元：「美」を感じたときに子どもはどんな言葉を発するのだろうかと考えていました。一般的には「きれい」という言葉だと思いますが，子どもたちにとって「美」を表す言葉はたくさんあり，「かっこいい」「すごい」「かわいい」「面白い」，あとは「カラフル」「虹色」とも言いますね。その子にしか感じえない「美」があると思います。

紺野：子どもたちは，日々違うものとの出会いの中で，自分自身をつくっているのではないでしょうか。友だちとの考え方の違いや見方の違いに気づき，不安になっている子もいるのかもしれません。教師としては，その子の目線に立って世界を見ることが大事だと思います。そうすることで，どんなところに「美」を感じているのか，見えてくるのではないでしょうか。

米本：子どもたちの心が動く瞬間というのが「美」なのではないでしょうか。ふとした瞬間に出てくるものかなと思います。「うまくいかなかったけれど，あれこんな風に見えるぞ」と気づいたり，失敗だと思っていたものが面白くなってくる瞬間など。できたものから感じるより，瞬間の心の動きが大きいのかなと。

倉元：奥山先生の言われる「共同制作の迫力ある美」というのは，全員にとっての「美」になり得るのでしょうか？

奥山：個人が感じる「美」はもちろんありますが，子どもの中で「美とは何か」なんて考えながらつくってはいないですからね。それとは別に，みんなでできた喜びや驚きによって，個人が感じている「美」がもっと大きくなるということはあると思います。

紺野：体感するということなのでしょうね。例えば粘土がドーンと何十kgもあったら，一人ではとても立ち向かえないですよね。でも三人だったらなんとかできるかもしれないから，「やってみよう」って体で立ち向かいますよね。

倉元：自分一人ではつくれなかったすごいものがつくり出せた瞬間の感動って，子どもたちは口に出すし，そういうワーっていう瞬間ってありますよね。

米本：達成感ですかね。

倉元：そう，達成感もありますよね。そこを「美」と切り離すべきなのかどうか…。混ざっていると考えても良いのですが，「美を感じる瞬間」というとまたちょっと違うような印象があって…。

奥山：「美」を狭義にとらえると，色・形・奥行き・構図・構成・技法・対称性・丁寧さ・複雑さみたいなところになってくると思うのですが，特に低学年だとそう細かくは考えていません。広い意味でとらえると「自分にとっての特別さ」というところになってくると思います。

米本：体感する，体全体でという話が出てきましたが，「美を感じる瞬間」ってもしかしたら「触れた瞬間」や「空間に入った瞬間」なども含まれてくるのでしょうか。

芸術的な「美」と驚き・発見の「美」

渡部：話が動いてきましたね。中学校に通じるような高学年的・芸術的な「美」と，低学年における表現の中での驚き・発見の「美」という話が出てきましたが，今の話では狭義の「美」としては小学校ではとらえさせたくない，広い意味で「美」をとらえさせていきたいということでした。**では「美」というものは広くとらえることが良いのでしょうか。その辺りのお話をしていただければと思います。**

倉元：図工の時間はその子にとっての「美」を大事にしなければいけない。その子にとって「美」の価値観をつくっていく時間でもあるからです。しかし，芸術的な「美」といわれる部分を伝えていくことも教師の責任ではないかと思います。「あなたが感じているものすべてそれでいいよ」ではなく，一方で狭義の意味での芸術的な「美」も教えていく。どちらか一方ではなく，両方なくてはだめだと思います。

米本：仕掛けておくということはあるかもしれません。教師の側で意識しておくというか。

渡部：**子どもの驚き・感動が「美」に結びついていくということがある一方で，芸術的な「美」というものにも気づかせていきたい側面がありますよね。その辺りのバランスは，どう考えたら良いでしょうか？**

紺野：絵の具を沢山入れたからきれいって言っていた子がいたのですが，きっと奥山先生は事前に絵の具は何色使いますということをちゃんと伝えますよね。それが米本先生のおっしゃる仕組んでおくということなんですよね。子どもがある条件の中で，自分では自由にやっていると思わせておいて，あっ見つけたって発見させるのだけれど，実はそれが美しさへと向かっているという状態であり，それが仕組んでおくということなのかなと思います。

奥山：今おっしゃったとおりで，混色指導のときは色数を限定してやる場合もあります。逆にローラー遊びのように自由にやって汚くなったらなったでよしというときもあります。きちんと押さえるべきことは押さえますが，子どもたちが自分で発見できることも別に用意するようにしています。どちらの体験も必要だと思います。

渡部：仕組むという話がありましたが，３色以上混ぜると美しくなくなってくるとか，そういう「美」というのは指導者の中にあるわけですよね。「美」とはこういうものだと。**ゆくゆくは，芸術的な「美」というものに収束させていかなくてはならないのでしょうか？**

米本：大人から見て汚い色をつくっていても，その子にとっては意味があるという場合があります。そういうことを省くために仕組んでいるわけではないのですが…。子どもが持っているものをまず丸ごと認めるということが大事なのではないかと思います。特に低学年の場合は，認めるということがスタートになりますし。

倉元：これが美しいものなのだと収束させていく必要はないと思いますが，子どもたちは「美」の価値基準を明確には持っていません。「いろいろなものを感じていきなさい。その中であなたにとっての美を探していきなさい」ということが，小学校での土台づくりになるのだと思います。

紺野：絵の具の授業をやっているときに，一枚を濁った色で，もう一枚を澄んだ色で描いた子がいました。「あなたはどっちが好き？」と私は聞いてみたのですが，その子はうーんって考えて，澄んだ色の方を選んだのです。考えさせたり選ばせたりする中で，私はこっちかなと決めさせていく。こういうことも必要なのでしょうか。

奥山：私も芸術的な「美」に収束させていく必要はないと思うのですが，小学校のうちに広く経験させることは大切です。最終的に決めるのは教師ではありません。個人差もあるので，限定的ないわゆる芸術的な「美」と，もう一方の広義の「美」と，どちらも経験させて選択できるようにするということだと思います。

多様な価値観の中で「美」を共有する

渡部：多様なものに気づかせる，体験させる，その中で子どもたちが選びながら「自分の美」を育てていくということでしょうか。**最後に，「美」を感じさせながら充実した表現をさせていくためには，私たち教師はどんなことを考えながら指導していくべきなのでしょうか？**

倉元：一つは子どもたちが何に「美」を感じているのか，教師が興味・関心をとらえて寄り添っていくこと。もう一つは，一人ひとりが持っている美意識は大事にしつつ，一般的に「美」といわれるものも感じ取らせていく。教えるというより気づかせていくような方向で。いろいろなことを経験させて，「美とは何なのか」という自分なりの価値観をつくり上げていく時間が図工なのだと思います。

紺野：題材のテーマや方法，材料などの中にある「美」について，これで良いと決めつけないよう，教師自身が常に問い続けることが大事だと思います。子どもたちを前にしたときに，「美しさ」を共有できているか，常に問いかけることが大切だと思います。

米本：教師は「先生」ではありますが，それ以前に一人の「人」です。「あなたのつくっているものに対してこう感じるよ」ということを伝えていく必要があると思います。それは「認める」ということがベースにあるからです。自分のやっていることは素敵なことなんだな，美しいものなんだなと感じられるようになったとき，子どもたちが一つ上の高みに上がる瞬間を手助けできるのかなと思います。

奥山：「美」を感じさせるためには，やはり教師自身が「美を楽しむ」ことだと思います。教師自身が楽しくないと子どもも楽しくないはずです。美しいものを見たとき，素直に「美しい」と言える環境や雰囲気づくりも必要ではないでしょうか。美しいということを表に出せるようにするには，言葉や表現力が必要になります。美を感じるには努力が必要で，その基となる感性や見る眼を育てていくことが重要だと思います。

渡部：今の世の中，子どもも大人も多様な価値観の中で生きています。ややもすると自分の価値観が優先されてしまうところがあります。自分が美しいと感じることも良いことですが，友だちが感じる美しさも認めてあげられる子どもを育てたいですよね。そういう子どもを育てられるように，我々も今後心して指導していかなければならないと感じました。本日は貴重なご意見を誠にありがとうございました。

まなびと+Plus vol.7

日文教育資料［図画工作・美術］

平成27年（2015年）9月30日発行

編集・発行人　佐々木秀樹

発行所　日本文教出版株式会社
〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33287

日本文教出版 株式会社
http://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171

東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618

九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696　FAX:092-521-3938

東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260　FAX:052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201　FAX:011-764-0690